

# 服のチカラ

世界を良い方向に変えていく



03

全商品リサイクル

「服の価値」を最大限に活かすために

MADE FOR ALL



UNIQLO





世界を良い方向に変えていく

## 服のチカラ 03

ユニクロでは、お客様のもとでご不要になった衣料を回収し、世界の難民・避難民に寄贈する「全商品リサイクル活動」を行っています。服の生産・販売だけではなく、回収し、本当に必要としている人のもとに届ける。これこそ、服の価値を最大限に活かす、「服のチカラ」だと考えています。

### contents

- 04 ユニクロの「全商品リサイクル活動」
- 06 二度目のネパール その服の行方
- 12 すべての難民の方々に、ユニクロの服を
- 14 難民キャンプで花開く、色とりどりの服 / LIO さん
- 15 活動の拠点・範囲を広げ、3,000万枚、寄贈するために

「服の価値」を  
最大限に活かすために

# 全商品 リサイクル 活動



ユニクロの服を買う



大切に、長く着る

着なくなったら、店舗にもどす



毎年3月・6月・9月にユニクロ全店で、お預かりする。服はお客様に洗濯をしてから、持ってきていただく

**RECYCLE**  
燃料化・繊維化  
リサイクル(約1割)

リユースできないものは、工業用繊維や電気エネルギーなどとしてリサイクル



# ユニクロの「全商品」リサイクル活動

「着なくなったユニクロの服、家にたくさんあるんだけど・・・」。ユニクロの全商品リサイクル活動は、お客様からいただいたお声から始まりました。

「まだ着られる・もう着られない」を分ける

# 7

## お伝えする

難民キャンプで見たこと、感じたことを、WEBサイトなどを通じて、お客様にご報告するとともに、次の活動に活かしていく

2001年にフリースの回収をスタート。2006年からは回収の対象をユニクロで販売する全商品に拡大しました。最初は、「材料」としてのリサイクルを考えていましたが、お預かりした衣料の多くが、まだまだ着られる状態であったこと、また「服」は「服」のまま役立てたいとの思いから、難民キャンプへの支援活動を開始。現在、お預かりした衣料のうち、実に9割近くを、世界中の難民・避難民の方々に寄贈しています。

**REUSE**  
季節、男女、上下など  
ニーズごとに仕分ける



ユニクロの従業員が自ら現地まで届ける。服を手渡した時に見せてくれる

難民の方たちの笑顔、その一方で、渡しても渡しても足りないジレンマもある



難民キャンプへ

## 服の届け先を決める

- ① 本来に必要な人に届けるために、UNHCR※を通じて現地のニーズを調査
- ② 寄贈候補地の政府に受け渡しを申請
- ③ 各国の文化的背景にも配慮し、ニーズの高い衣料を選定

# 5



※UNHCR(国連難民高等弁務官事務所): 1950年に設立された国連の難民支援機関。難民・避難民を国際的に保護・支援し、難民問題の解決に努めている。1954年と1981年にノーベル平和賞を受賞。本部は、スイス・ジュネーブ。



あれから2年。  
ユニクロは何を  
届けることが  
できたのか



あのときの少女、  
あのときの服

少女が微笑んでいる。名前はギータ。一家に手渡した10枚の中から、彼女は白い服を選んだ。2日後にネパールのお祭りがあって、そこに着ていきたいという。服と一緒に2年前の写真も手渡した。紫の、小さなからだには大きすぎるパーカー。2年前の自分の写真を見て、少しはにかむ。彼女は、覚えていた。届けた服にこめられた思い……。ギータのお父さんは、ブータンから逃げてくるときに背中を鞭のようなもので叩かれて、脊髄が傷つき、働けなくなつた。お兄さんも知的発達障がい者。難民の中でも過酷な環境におかれている。前回、今回と衣料を届けたユニクロCSR部の



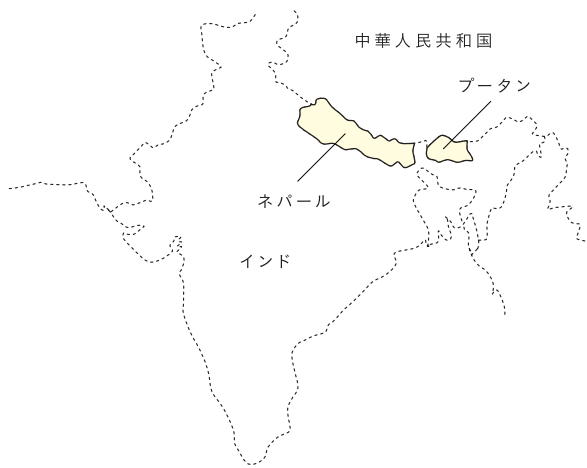
ユニクロ CSR部 シェルバ英子(左) / ギータ(右)

シェルバ英子にとっても、印象深い難民のひとりだ。「ギータは2年前のことをよく覚えていてくれました。なんとなくだけれど、私のことも。2年前はあどけなかつたのが、現在は14歳で大人っぽくなった姿を見るとちよつとジーンときましたね。私たちが2年前に届けた服は、お姉さんの分と合わせて、お母さんがよ

そいき用にしまっておいてくれている。普段の服の数さえ足りないのに、ハレの日のためにと、大事に、大事にしてくれている。今回も、渡した衣料のうち、お気に入りのものを選んで、すぐに着てみせてくれた。」服の役割は、暑さや寒さから身を守るだけではない。白い服にかがやく笑顔が、大切なことを教えてくれた。

## 全商品リサイクル活動ルポ 二度目のネパール その服の行方

2009年9月。2007年にユニクロとして初めて寄贈した、ネパールを再び訪れた。2年前に届けた服は役立っているのか？ 2年前と比べて、何が変わり、何が変わらなかったのか？ 服には、どんなチカラがあったのか？



ブータン難民：19世紀後半から20世紀初め、経済的理由から多くの人々がネパールからブータンに移住。ブータン国籍を取得した。しかしヒンズー教徒中心のネパール系ブータン人は、仏教徒の主流派ブータン人とは、民族的・宗教的に異なる。1980年代、「民族主義的政策」がとられるようになると、多くのネパール系ブータン人がブータンを追われ、現在、ネパール南東部の7つのキャンプには約8万人の難民が住み、厳しい生活を強いられている。

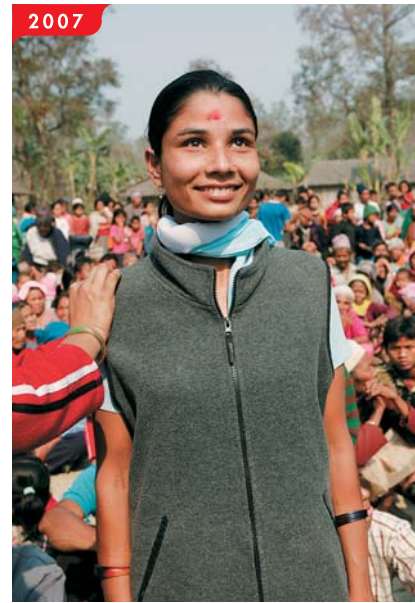




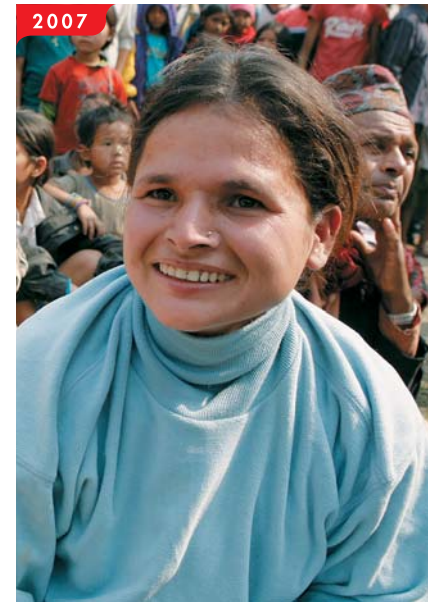
耳が聞こえない少年。  
2年前と相変わらずの笑顔でポーズ。



少年とそのお父さん。  
2人そろって、第三国に  
定住することを希望している。



視力に障がいのある少女。  
新しい服を手渡すと、とても喜んで着てくれた。



持っている服は全部で5着。  
2007年にもらったフリースは  
ぼろぼろになるまで着た。

いない。もう40万着ほど寄贈しているけれど、一人あたり3、4着しか持っていないので、夜洗って次の日の朝着るといふ生活を、いまだに続けているんですね。」  
数に限りがあり、全員には配布されない。どうしてももらえない人がいる。社会的にも弱い方からと、優先順位をつけるしかないのだが、小さな妬みや失望を生んだりもする。キャンプの外をみれば、ローカルの人々の生活も決して楽ではない。同じように服を求めている人がいる。喜んでもらっているうれしき、手応えを感じつつも、喜んでばかりはいられない現実と、まだまだ残る大きな課題。答えは、ひとつ、ひとつ、できることを積み重ねていくことで見つけるしかないのかもしれない。

二度目のネパール訪問となったユニクロのシェルバ英子。今回はネパール人の通訳を頼んだ。もつと難民の人たちから生の声を聞きたいと考えたからだ。「衣料自体、まだまだ足りて

## 2 Years After 二度目の笑顔の 先にあるもの



# 未来へのひとつの扉 「第三国定住」。 希望の光を追いかけて

ネパールの難民キャンプは、受け入れを表明しているアメリカなどの第三国への移住＝第三国定住が、ようやく動き始めたことで、大きく変わり始めている。約10万人の難民うち約8万人が移住を希望し、09年9月中旬の時点で既に約2万人が新しい土地へと旅立った。

ただし、すべての人が第三国を望んでいる訳ではない。母国のブータンに戻れないのであればそのまま難民キャンプに残りたいという考えを持つ人もいるという。

第三国定住が、本当に明日への希望の光となるのか？ 彼らの本当の声を聞き、問題を理解したうえで、服の支援に加えてその行く先まで見届けることが、大切なだと、心から、思う。



## 旅立ちの前に その服の先に

さまざまな思いを抱えて、最後の訪問先、IOM(国際移住機関)トランジットセンターに立ち寄る。第三国定住で、出発の直前に滞在する施設だ。そこで、偶然、ユニクロの服を着た女性に出会った。鮮やかなオレンジとブルーのコーデインイト。品格がにじみ出るような、凛とした眼差しと、身にまとわれた憂いが、否が応でもシェルバ英子たちの視線を釘づけにした。服は2年前に日本からの支援でもらったという。たくさん辛いことがあり、少しの希望が残った。実は彼女には3人の息子がいる。でも一緒に第三国に出発できるのは、そのうち2人だけだ。長男(24歳)は、一緒に旅立つことができなかった。新生活への希望を持ちながらも、息子一人残していくことの辛さを、



また家族と一緒に暮らせるということが、どんなに幸せかということ、彼女は少ない言葉で私たちに教えてくれた。シェルバ英子は語る。「この施設に来た人たちは、みんなすごくおしゃべりをして、きれいにしておしゃれをしている。ハレの日ですよね。そんな時にユニクロの服を着てくれている。機能だけではない服を持つチカラを実感できたことは幸せでしたね。」その女性は、旅立ちの服を身にまとい、2人の息子とともにカメラの前に立ってくれた。ユニクロの服だとも、日本の服だともわからないけれど、とても喜んで、気に入ってくれているのがわかる。そして、あらためて、思う。その微笑みの行方を私たちは、追いかけていかなければならないのだと。希望の光を、やがて未来へのががやく道に変えていくために。





ユニクロの全商品リサイクル活動が始まって、4年目。

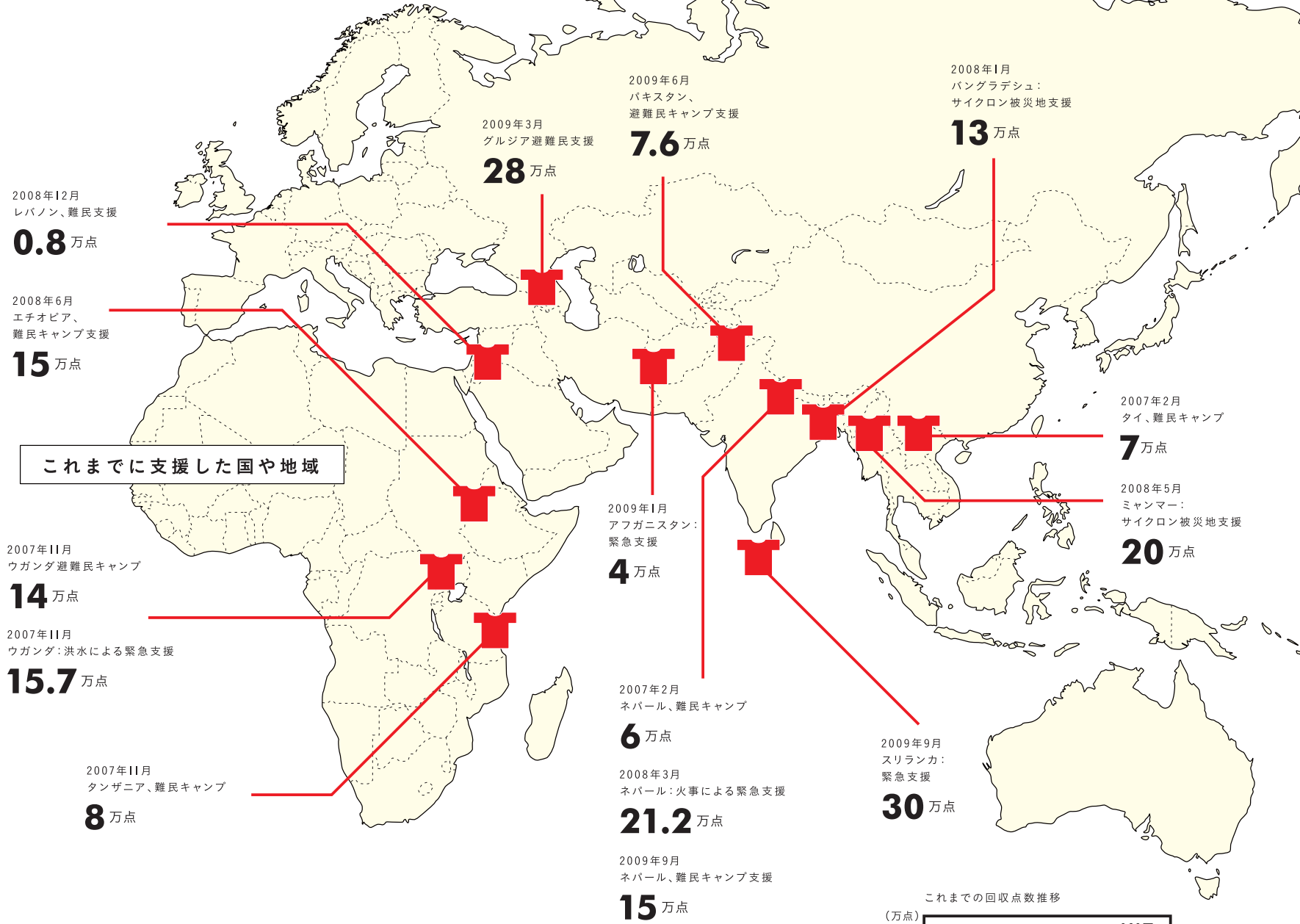
2009年の回収枚数は、約262万枚、これまでに回収した総数は約508万枚にのびます。

お客様にご賛同・ご協力いただき、毎回、回収点数は増えつつあります。

でも、ユニクロの年間生産数は約5億着。この数に比べると、まだまだだと考えています。

私たちは、約3,000万人と言われる、世界中のすべての難民・避難民の方に、

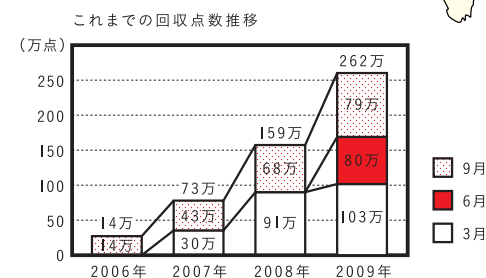
ユニクロの衣料を届けることを目指しています。



世界の難民・避難民数、約3000万人。  
すべての難民の方々に、  
ユニクロの服を、  
一人一枚、

寄贈した総数 約 **2,053,000** 点

世界の難民・  
避難民数 約 **30,000,000** 人



## 難民キャンプで花開く、色とりどりの服

文、写真：フォトグラファー LIIO (リオ)

1980年生まれ。札幌出身。法政大学卒業。1999年からアジアを中心に撮影を続けながら、困難のなか遅く生きる人々に魅了される。近年はインド、ネパール、チベットを中心に活動を展開。フォトフリーペーパー 8ILAB(www.8ilab.com)に参加。DAYS JAPAN 寄稿歴あり。www.liograph.com



秘境の国ブータン。そんなイメージのブータンから、ネパールに渡っている難民がいると知り、インド国境に近いネパール東部の難民キャンプに向かった。

キャンプの住民に難民生活の苦楽を聞きながら竹でできた簡素な家の周りを歩いていると、軒先に見覚えのあるオレンジ色のフリースが干してあるのが目に入ってきた。もしやと思っただけでみるとやはりユニクロのタグがついている。家の主に声をかけてみると2年前多くの世帯にユニクロの服が配られたと言う。しかし彼らの認識はUNHCRを経由して各国からくる援助物資のひとつ。「このフリースはユニクロという日本の企業が作っていて、多くの日本人が持っている服だよ。ほら、僕も着てるよ」とベストのタグを見せると、笑いながら撮影

に応じてくれた。彼らの人なつっこい表情だけでなく生活環境やいつも着ている服とのコーディネートが伝わるポートレート撮影するためにそれぞれの家の前や室内で撮影をした。ある男子は撮影時にTシャツを裏返して着ていて、「表はベニキで汚れちゃったから最近裏にして着ているんだ」と笑っていた。一度日本で役割を終えた服が大事に扱われ、再び命を温かく包み込んでいる様子は服の基本的役割を我々に伝えてくれる。そして多くの失望を胸にしまいながら生活を営む難民の方々に服を届けることは日本に住む誰かが彼らのことを気にかけているというメッセージを送ることもなり、一枚の服が持つ暖かさ以上に彼らの心にぬくもりを伝えることになるだろう。

## 活動の拠点・範囲を広げ、3000万枚、寄贈するために

ユ

ニクロは、年間約5億着の服を生産・販売している企業として、お客様に大切に着ていただいた後の、衣料を回収しリサイクルしていただくことも重要な責務だと考えています。2006年から展開している全商品リサイクル活動では、たくさんのお客様にもご賛同・ご協力をいただき、2009年の回収点数は約262万枚のぼりまし。回収点数の増加に伴い、寄贈する点数も毎年増加しています。しかし、全世界の難民の数は3170万人と言われおり、まだまだ衣料が不足している状況です。難民キャンプを訪問するたび、私たち自身も実際にお渡しする中で、衣料が足りない現実に直面しています。

ユニクロでは、世界中の難民の方々に、ひとり着ずつ衣料を届けるために、5年後までに3000万枚回収することを目指しています。そのためには、3・6・9月に店頭で回収するだけでは到底足りず、活動をさらに広

げていく必要があると考えています。その一環として2009年度は、都立高校と連携し、高校生が主体となって学校や地域に呼びかけ、衣料を回収する活動を展開しました。また、店頭回収に加えて「世界難民デー」記念イベントや、町田市の商業施設「ミーナ町田」のイベント会場などでも、衣料の回収を行いました。さらに、より多くの方に難民問題を知ってもらうことを目的に、「UT×UNHCRチャリティTシャツ」プロジェクトも展開しました。当プロジェクトは、UNHCRサポーターをはじめ、さまざまな分野で活躍中のアーティストと共同でチャリティTシャツを製作するもので、販売による収益は、すべてUNHCRへの寄付と難民支援活動に充当しています。

こうした活動に加えて、今後は、全従業員が活動の本質的な意味を理解し、自らさまざまなアクションを起こしていくような形に、進めさせていきたいと考えています。

アンケートへのご協力をお願いいたします。

ファーストリテイリングでは、「服の子カラ」についてご意見・ご感想をお待ちしております。皆様からご意見をいただくことで、改めて自社の取り組みについて見直し、今後の活動につなげていきたいと考えております。アンケートハガキにご記入のうえ、ご返信ください。皆様からのご意見をお待ちしております。

「服の子カラ」は、ユニクロ店頭のほか、右記WEBサイトからもご覧いただけます。

「服の子カラ vol.1」障がい者と働くということ



「服の子カラ vol.2」HEATTECHが生まれる場所



「服の子カラ vol.3」全商品リサイクル活動



URL: <http://www.fastretailing.com/jp/csr/>



